

学 位 論 文 要 旨

氏 名 鳥井 淳貴

題 目 批判的思考態度を育む大学体育実技に関する実証的研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究の目的は、大学体育における学習者の批判的思考態度に着目し、その育成に資する要因及び教育的条件について、理論的並びに実証的に検討することである。

これまでの研究により、身体活動や運動が心身の健康維持・体力向上に寄与することは多くの科学的知見によって示されている。一方、わが国における身体活動・運動の実施状況は依然として低調であり、とりわけ大学生を含む若年成人層においては、運動習慣を持たない者や改善意思を有しない者が一定数存在することが報告されている。社会的自立や職業的アイデンティティの形成を控える大学生にとって、心身の健康を維持し、主体的に生活を構築していくための支援は重要な課題である。

こうした支援において、大学体育は生涯にわたる運動・スポーツ習慣の形成を視野に入れ、スポーツの意義や価値を体験的に学ぶ機会を提供する教育的資源として重要な役割を担うと考えられる。大学体育の教育的効果については、身体的側面のみならず、心理的・社会的側面への影響も指摘されている。しかし、運動の有用性が広く認知されているにも関わらず、運動行動が必ずしも継続されない現状を踏まえると、学生が運動やスポーツの価値をどのように捉え、どのような思考態度に基づいて行動を選択しているのかを検討する必要がある。運動行動は他者から強制されるものではなく、個人がその意味や価値を吟味した上で選択・継続される行動である点に特徴がある。

そこで本研究では、この課題を解決する一因として批判的思考態度に着目した。さらに、教育の質保証の観点から学修成果の可視化が求められるなか、大学体育の受講を通じて学生がどのような主観的恩恵を知覚しているかを明らかにし、その獲得を支える要因を検討することは重要である。

本研究は、三つの研究から構成されている。研究1及び研究2は横断研究、研究3は準縦断研究として実施した。研究1では、ウェブアンケート調査を実施し、不完全な回答や欠損値を含むデータを除外した570名を分析対象とした。批判的思考態度、運動動機づけ、運動継続の自信を変数とする仮説モデルを設定し、共分散構造分析によって検証した。研究2では、同様の方法で収集された753名を分析対象とし、動機づけ雰囲気、体育授業におけるスポーツ経験、批判的思考態度を変数とする仮説モデルを設定したうえで、性差を考慮した多母集団同時分析によって検証した。研究3では、必修体育授業二クラスを履修した学生を対象に、授業前後で質問紙調査を行い、最終的に137名を分析対象とした。批判的思考態度及び主観的恩恵を変数とする仮説モデルを設定し、共分散構造分析によって検

証した。これにより、本研究は、横断的視点からの関連構造の検討と、授業実践を通じた変化の検討を組み合わせ、大学体育における批判的思考態度の位置づけを多面的に検証する構成とした。分析の結果、研究1では、批判的思考態度が運動動機づけ及び運動継続の自信と直接的あるいは間接的な正の関連を有する構造が確認された。研究2においては、男子・女子いずれのモデルにおいても、熟達雰囲気は批判的思考態度と直接的及び間接的に関連することが示された。さらに研究3では、授業前の批判的思考態度が授業を通じて得られる主観的恩恵と正の関連を示し、さらに主観的恩恵を介して授業後の批判的思考態度と関連する構造が確認された。

以上の結果から、大学体育における批判的思考態度は、学生の運動に対する肯定的な認識や学修成果の獲得を支える心理的基盤として機能する可能性が示された。本研究は、大学体育における批判的思考態度を育成の対象として位置づけ、その関連構造を実証的に明らかにした点に学術的意義を有する。また、本研究は、大学体育を通じた学修成果の獲得過程を、批判的思考態度という認知的・態度的側面から統合的に捉えた点において、先行研究を補完し、大学体育研究の理論的枠組みの拡張に寄与するものである。一方で、本研究は横断研究及び準縦断研究に基づく分析であり、因果関係の推定には限界を有する。今後は、縦断的研究を通じて、大学体育における批判的思考態度形成の過程をより多面的に解明することが求められる。